

## 我國中小工業の現段階的意義

森, 耕二郎

<https://doi.org/10.15017/4150438>

---

出版情報：経済學研究. 5 (2), pp.1-40, 1935-06-30. 九州大学経済学会  
バージョン：  
権利関係：

# 我國中小工業の現段階的意義

森 耕 二 郎

## 目 次

- 一 問 題
- 二 我國中小工業謳歌の説
- 三 我國中小工業の存在理由
- 四 殘存的中小工業いくばく？
- 五 結 語

## 一 問 題

昭和六年末の我國金輸出再禁止以後、圓價の下落をその初發的動因として、そしてそれに附帶して起つたさまざまな事情と相俟つて、我國輸出貿易は、その金價値評量に於ては兎も角、數量的にはなほだしき躍進を遂げ、いはゆる日貨進出の脅威は世界のあらゆる國々までにも問題とせらるゝに至つたこ

とはすでに誰れびとも知つてゐる。更にこの輸出貿易については、近代的大規模産業とも云はるべき人絹、紡績等の飛躍的進出はさることながら、それと相並んで中小規模工業にもとづく各種の輸出商品、すなはちいはゆる雜(貨)品なるものが、あなどるべからざる勢を以て進出し來つたこともまた衆知のことからである。

それで近頃ひとびとは、いま更ながら、我國に於ける中小工業の存在の意義を高調し始め、從來必然的に衰滅、没落に終る運命にあるかに思はれてゐたこれら中小工業のこのたびの勃興更正をば、こゝぞとばかりに問題となし、それは我國産業の特殊性にもとづくものであるとなし、その永遠的存続の可能について語り始めた。従つてまた今までの中小工業對策の轉換がさげばれて來た。最近(昭和十年四月)刊行されたところの社會政策時報特輯號、『中小工業問題』に於ける諸學者の中小工業に對する態度は從前のそれとはすつかり變つてゐる。實にあはたましい變り方であると云はねばならぬ。

更にまた最近年に於ける農業恐慌、それから我國農業のさまざまな特種的性質にもとづき、我國農村の疲弊はまことにはなほだしきものがあるが、この疲弊せる農村救濟の一手段として、最近に至りて、農村の工業化、すなはち小規模の農村家内工業の獎勵が唱かれ始めた。

さてすでに吾々の常識的知識となつてゐるやうに、この資本家的社會に於ては、大企業組織は小企業組織を仰壓し、遂に前者の壓倒的支配の下に後者は没落に頻せざるを得ない、との一般的法則が信ぜら

れてゐる。そしてこの法則の妥當性いかんは前世紀の後半、歐洲の先進資本國に於てしばしば問題となつたが、それに對する修正的見解はそののちの世界經濟の進行によつて裏切られ、右の過程は依然としてこの社會に於ける本則的なるものとして今に至つてゐることが實證された。

いつたいかゝる最近に於ける我國中小工業の勃興乃至重要さは、果して右の本則に對する例外を爲すものであらうか。我國國民經濟に固有なる永續的なる特殊事情にもとづくものであらうか。それら中小工業は我國の運命的産業であらうか。それは決して右の本則的過程の進行を破るものではなく、この世界經濟發達の現段階に於けるさまざまなる一般的なる現在の事情、我國資本主義發達の特殊性、それから我國經濟の最近に於ける幾多の工作的事象等に因るものではあるまいか。だからそれら諸事情の一部でもの解消は同時に、この我國中小工業謳歌の聲をひそめることゝなりはせぬか。中小工業の我國産業に於ける現在の重要性は、むしろ事實として認めねばならぬにしても、その永續的存在に對する過大評價には大いに警戒すべきではあるまいか。吾々はこれらの疑問に答ふところあらねばならぬ。

吾々は我國中小工業存在の特殊事情を無視するわけには行かない。が普通一般に擧げらるゝさまざまの特殊性のゆゑに、その存在が主張さるべきではなく、むしろ彼等の忘れ勝ちなる特殊の諸事情を擧げたい。しかもそれら我國産業、また従つて我國中小工業の特殊性の存在のゆゑに、右に述べたる大企業支配の本則的過程は決してそれがために排除さるべきではないのである。

世界恐慌をきっかけとして、最近に於ては、資本の攻勢、産業の獨占化の進行等がいつこの資本國に於ても一段と旺んに行はれ來つてゐることは、たれしも知つてゐる。我國もその例にもれない。しかるにかゝる一方に於ける産業獨占の強化、大資本の支配の事實あると同時に、他方に於て中小工業勃興の聲をきくのは、いつたいいかなる事情に由るのであらうか。一般的にこの段階に於ては、中小工業は決して華々しき運命の下にあるを得ないのは自明の事實であるとせられた。しかるにこの頃ひとは我國中小工業の繁榮を云ふ。そこに中小工業のあはれ運命があるかのやうである。

我國中小工業に於ける労働條件がいかに劣悪なるものであるかは、從來よりよく知られてゐる所であるが、かゝる低劣なる労働條件を何とかして改善せねばならぬ、乃至はかゝる條件の下に於ける中小工業の存在は許さるべきではない、と云ふが如き社會政策的見地からの我國中小工業に對する批判は、もちろんそれ自體として大問題である。がこゝではかゝる社會政策的視點からでなしに、かゝる中小工業の存在は、この世界資本主義發達の段階に於て、しかも日本資本主義の特殊性に於て、果していかなる事情に根據づけられてゐるか、しかしていかなる將來的運命を擔つてゐるか、我國中小工業對策は果してこの際一大轉換を要求すべきであるか否か、等々について若干吟味して見たいと思ふのである。

## 二 我國中小工業謳歌の説

最近我國の産業乃至輸出貿易のうちに於て占むる中小工業の主要なる地位からして、すなはち我國重要産業は中小工業にあるとの見地からして、中小工業の意義を見直ほし、それに對して何等か従前とは異なる新らしき助長的政策を講ぜねばならぬとの見解が行はれて來た。そしてそれらのものゝ多くは、我國の中小工業は決して資本主義の發達に取り殘されたるものではなく、いはば新興中小工業であつて、その前途は輝やかしいものである、尠くとも悲觀すべきものではない、と云ふのである。我國産業の將來は、これら中小工業の發展によつて運命づけられてゐると云ふが如くである。かゝる立場からして我國最近の中小工業を問題とするひとびとの所説を若干こゝに吟味して置きたい。

最初に我國最近の中小工業が我國産業上乃至貿易上に於て占むる重要性いかに對しての概觀から始める。いまのところではその詳細なる統計的數字はただ煩はしいだけで、その必要はなかりさうだ。

中小工業と大工業との區分を何處で決めるか、も一つの問題であるが、我國商工省に於ては、一般工業については使用職工百人未滿のもの、但し化學工業、瓦斯電氣工業については、前者五十人未滿のもの、後者三十人未滿のものを中小工業と見做し、それ以上のものを大工業と見做してゐる。いまそれに本づく統計を擧げんに左の如し。

我が工業に於ける中小工業の地位

業種別	工場數		同上割合	職工數		同上割合	生産額		
	總數	中小工業		總數	中小工業		總額	中小工業	同上割合
紡織工業	二二,二七九	一九,七五九	九二・七%	八八一,四九九	三三,七五九	三九・七%	二,三二二,〇八八	六九七,二六九	三〇・五%
金屬工業	四,六五二	四,五三七	九七・五%	九七,四六九	五八,六〇八	六〇・一%	五九一,二三三	三三六,一二三	三九・九%
機械器具工業	六,七三六	六,四九四	九六・四%	一九四,五七三	八二,八六三	四二・六%	五九八,八四〇	一九一,四三三	三二・〇%
窯業	三,四四五	三,四三三	九六・九%	六八,八一三	三九,六三六	六四・一%	一六,七二六	五五,七〇一	三三・二%
化學工業	三,六九五	三,一八一	八六・一%	一三六,〇二二	四二,九八二	三一・一%	九五七,九五六	二四八,八八八	二六・五%
製材及木製品工業	五,四三四	五,四〇三	九九・四%	六〇,六二六	五五,三三七	九一・三%	一五八,七五六	一四一,二八八	八八・九%
印刷及製本業	二,九八八	二,九二三	九七・八%	五三,三五三	三七,四〇〇	七二・四%	一七七,七九七	八一,二九九	四五・七%
食料品工業	一一,七三六	一一,六一九	九九・一%	一三七,四三三	一一八,六五九	八六・三%	八九三,四七六	六三三,四七六	七三・四%
瓦斯及電氣業	五〇八	四六六	九一・七%	七,九六八	四,一九五	五二・六%	—	—	—
其他工業	六,〇三四	五八九九	九七・八%	一一〇三,八〇八	六六,八八一	六六・四%	二三七,二九四	一五二,七九〇	六四・四%
計	六七,三二八	六四,四〇三	九五・七%	一,七七三,五二一	八四〇,八五三	四八・五%	五,九九〇,〇六〇	二,四五八,八二〇	四〇・二%
前年同上	六四,四三六	六一,五七三	九五・六%	一,六六〇,三三三	七九〇,四六五	四七・六%	五,一六三,三七六	二,一七三,〇六六	四二・二%

(備考) 昭和七年度商工省工場統計表に依り算出。(改造一九二五新年號、高橋龜吉氏論文による)

右表に依れば、昭和七年に於ては、我國中小工業は、全體のうち、工場數から見れば九五・七%、使

用職工數から見れば四八・五%を占めてゐる。が工場數や使用職工數の割合からだけでは、一國産業に於て占むる地位の重大性を推則し得べくもない。中小工業の救済、勞働力の保持、増進、失業救済等々の觀點からは、それらのものはそれぞれ何かの有用性を有つてゐるけれども。中小工業の地位のいかんを見るについては、生産額の大小いかなの問題が中心であらう。右表に在りては、我國中小工業の生産額の全生産額中を占むる割合は四一・二%である。半ば足らずといふ所である。しかし右の統計に於ては、使用職工數五人未満の小工場は除外されてゐる。それでこれをも右に加へるとなると、我國中小工業の占むる割合はずつと増えることゝならう。

次に我國中小工業が我國輸出貿易のうち如何なる地位を占めてゐるかについての最近の調査報告として、東京商工會議所の發表にかゝるものがある。いまその概觀的數字をかゝげる。

重要輸出品工業における職工別工業生産割合

(單位%)

	百人未満	百人以上
綿織物	六八、三	三一、七
人絹織物	九二、四	七、六
罐詰食料品	七一、九	二八、一
メリヤス製品	七三、〇	二七、〇
小麦粉	七八、四	二一、六
硝子製品	四一、〇	五九、〇
生糸	百人未満 二〇、八	百人以上 七九、二
絹織物	八一、八	一八、二
陶磁器	八三、四	一六、六
鐵製品	六一、四	三八、六
ゴム靴および ム底靴	二三、二	七六、八
自轉車	六九、六	三〇、四



帽	子	七一、六	二八、四	水	産	物	九四、七	五、三
電	球	一六、七	八三、三					

これで見ると職工百人以上を使用せる大工業とも目すべきものが全生産額の過半以上を占めてゐるのは、僅かに生糸、ゴム靴類、ガラス製品、電球にすぎない。『日本の輸出工業の基礎は飢餓的小工場』にある（ロンドン・エコノミスト）など、云はれるわけである。

右は我國中小工業の地位を推測し得るホンの概観であるが、これによつてもそれが我國工業のうちに於て有する重要性がわかる。そこで近頃多くの學者、實際家はしきりに中小工業の重大性について語り始めたわけであるが、しかしそれらのひとびとは中小工業の重要性について餘りに過大評價に陥つてゐはせぬかと思はれる。

前にも一言したやうに、労働者數はこの際問題ではない。我國に在りては、失業保險制度が缺けてゐることも一原因となつて、たればとも何とかして職業を捜さざるを得ないが、彼等は止むを得ず、しばしば極小規模の工業、むしろ生業的職業に陥ち込まざるを得ない。でかゝる半失業者をも使用職工者數に含ましめて我國中小工業の地位の重大さを實證しようとするのはどうかと思はれる。のみならず我國に在りても、最近まで變化なく、小經營（五人―百人）に屬する従業職工者の割合は漸次減少し來れるに反し、大經營（百人以上）に屬する職工者の割合は漸次増加しつゝある。

また資本の大小についての統計は右表にない。が資本集中の傾向が我國に於ても最近益々著しいことは何人も否定し得ない。大資本の支配は同時に概ね大規模産業の支配を物語るが、さうでなくして物的技術的には依然として、大資本の支配するに拘はらず、小規模産業が存続する場合に於ても、資本關係に於てはすでに獨立性を失つてゐるもの、すなはち何等かの大資本の制覇の下にある中小工業がすこぶる多い。單なる物的規模の大小だけではこの問題の所在を明らかならしむることはできない。いま最近發表せられた東京市工業調査第二次速報によつて、東京市内工業に於て、いかに巨大資本が益々その支配力をのばしつゝあるかを見よう。全工業資本の七割はこの巨大資本によつて占められてゐる。

企業組織別から見れば、法人組織が全投下資本の七割八分弱を占め、九億六千二百萬圓であるに對し、個人組織は二割二分強の二億七千八百萬圓にすぎない。法人組織中株式會社がその大部分を占めてゐるが、更に一工場當り資本を見ると、法人は卅六萬八千圓（うち株式組織九十九萬七千圓）に對し、個人三千餘圓にすぎない。

次に資本別について見んに、大資本群の小數者が（資本五十萬圓以上）全工業資本の七割を占據し中小資本群は残り三割を分有する結果、一工場當りでは、資本金五百萬圓以上のもの千四百八十七萬餘圓、資本金五十萬圓乃至百萬圓のもの七十萬八千餘圓を示してゐるに對し、最零細階級は僅に五十六圓である。最大資本群資本五十萬圓以上のもの二百八十二工場、最小階級職場資本百圓未滿のもの千五百八十である。

それどころでの批判的結論として達した所は、中小工業の地位を見ようとする場合、従業労働者數から見たものは、さし當り問題の外に置かるべきであると云ふこと、それから中小工業の存続について語る場合、資本關係を抜きにしては、眞の中小工業の存在、將來について何事をも云ひ得ないこと、であ

る。

右のやうな我國中小工業の現状に見て、中小工業は必らずしも没落する運命にあるのではない、尠くとも我國のそれは、我國特殊の諸事情にもとづき、その永續的將來を有つものであるとして、最近多くの學者がいはゞそれを謳歌するが如き態度を見せて來た。その所説の主要なるものを摘出せんに――

(一) 資本主義の發達に伴ひ中小企業は大企業に壓倒せられ、遂に少數巨大企業の産業支配が實現する、との法則は誤である。いまなほ中小企業はひとり我國のみならず、多くの産業部門に於て見られる所であつて、中小企業は當然にその存在性を有つてゐる、と云ふひとがある。例へば谷口教授は云はれる、『資本主義經濟組織の發展における鐵則とし、何人も信じて疑はなかつた一つは、小規模から大規模へ、小資本から大資本へといふ企業集中または資本集積の法則である。然るにこの法則もまた他の多くの經濟法則と同様に、果してこれが今日においても文字通りに進行してゐるかどうか、今日の現實に直面し事實に立脚して、更に之を新たに直直さねばならぬではないか。』『なる程或種の産業部門にあつては、すでに今日でも大規模企業の壓倒的優勢を勝ち得たものもある。けれども寧ろ多くの産業部門にあつては、今日尙ほ多數の中小企業が殊存し、また將來にもその存在を續けるのではないかと思はれるものが、意外に多いのではないか、たゞ大規模企業の出現は、著しく世人の注目を惹くに反し、中小企業

1) 谷口博士、家内工業と吾が國民經濟(社會政策時報百七十五號 49頁以下)

の残存は多く世人の注意を喚起しないがために、現實の認識を誤らしむるが如き場合も少くはないであらう。』

同教授は中小工業残存の根據として、消費財の生産には中小工業の方がより適すること、小規模工業にも機械化が容易に行はれるやうになつたこと、資本關係に於ても中小規模企業は、大企業に於ける如く、特に一定の利益配當を必要としないがために、有利であること、勞働關係に於ても小規模工業に在りては、勞働爭議や階級闘争の起る危險性が少いために、強味があること、また事業の弾力性に於ても中小企業は大企業の及び得ざる強味を有つてゐること、等を擧げられる。

更に中小規模工業の残存し得る根據は、最近の經濟的變革と共に、新たな要素を加へつゝあるとして同教授は最近の動力革命（蒸氣動力より電氣動力への移向）、最近の交通革命、放任經濟より統制經濟への變革、企業集中形態の變化等々について語られる。しかして同教授によれば、これらの諸要素は我國民經濟に於て特に見だされるものであるから、我國中小工業は當然に永續的存在の根據あるものであり、むしろ我國の民族的産業である。

(二) 次に中小工業の一般的存在理由を主張するといふよりは、むしろ日本資本主義發達の特殊的諸性質にもとづく中小工業の永續的存在を高調するひとがある。我國中小工業の重要さを説くひとにしてこの特殊性を主張しないものはないわけではあるが、こゝではこの主張の代表的なるものとして高橋龜

吉氏の説かれる所を紹介しよう。<sup>1)</sup>

『現在日本に於ける中小規模（工業）は、一般の場合の如く、大規模化への過程的性質としての中小規模ではなくして、その多くは、多分に永久的性質のものである。こゝに日本資本主義經濟の一大特殊性が横はつてゐる。』

氏は我國中小工業の優位がいかにして齎せられたかに答へて、生産技術、原料及び販路關係に於ける特殊事情の結果、所謂本質的に中小工業を有利とするもの、經營の有利と云ふ點からは、當然に大工業に轉化すべき性質のものでありながら、資本その他の條件が未成熟のため、致方なしに、中小工業型態に過渡的に殘留してゐるもの、等を擧げるほか、次の二點、特にその第二のものを高調される。

（一）生産動力の革命の結果、中小工業が特に有利となるに至つたことに基因するもの。例へば從來に於ては、動力は専ら蒸汽力に限られたが、之は一定規模以上の生産設備と連續作業とを必要とする。従つて大規模工業を有利にしたが、今日は電力の普及の結果、如何なる小規模、且つ不連續的作業にも動力を利用し得るに至つた。のみならず、工業そのものも、從來の如き大資本力の外、頭腦力により、多くを依存する精密工業發達して、これまた中小工業を新に有利にするに至つたと云ふが如き生産方法の革命に基くもの。

（二）中小工業型態をとることによつて、最も低廉に勞力を利用し得られ、さうすることによつて、

1) 高橋龜吉氏、中小工業の優位と日本經濟の特殊性（社會政策時報百七十五號 69 頁以下）

大工業と有利に競争し得られると云ふ事情に基くもの。

同氏は我國中小工業の存在理由として我國の低勞賃、低劣なる労働條件について特に多くを語られ、それは必然的のものとせらるゝが如くであるから、謳歌論者と云ふことは若干云ひ過ぎであるかも知れない。が我國中小工業の重要性を高調し、しかもその永續的存在をかたく信ぜられるのであるから、一種の謳歌者と刻印してもいゝであらう。

この我國低勞賃の基本的理由として、同氏は次の諸事象を挙げられる。

(1) 我々の人口過剰にして、労働豫備軍多く、低康なる勞力を豊富に容易に使用し得ること。之を裏返へして云へば、如何なる低劣條件に於ても、働かざるべからざる状態に労働者の多くが置かれてゐること。

(2) 加之、資源の貧弱及び右(1)の派生的結果として、本業労働者に對する報酬低廉にして、一般に、補充的収入を要する事情にあること。特に――

(イ) 農閑期に於ける農村勞力利用の仕事の必要なること。

(ロ) 都市生活に於ては、家計補充のため、家族の補助収入的労働乃至内職の必要なること。

これらの我國中小工業論によつて吾々の學ぶところも多くあるが、また大いに批判の對象としたい所もある。いまこゝでこれらの我國中小工業論に對して一々批判することをせぬ。以下の分析によつて批

判して行きたいと思ふ。

### 三 我國中小工業の存在理由

さてかやうにその重要性が説かれる我國中小工業は、しかしながら、彼等の云ふが如き存在的理由をもち、従つてまた將來に於ても永續的存在を保ち得るであらうか。以下に於て私は我國中小工業の存在理由、その將來について吟味して見たいと思ふ。その現在に於ける存在性を分析することは、果してそのいくばくが、いかなるものが殘存的乃至永續的中小工業であるかを推測する基本的知識を供することにならう。先づ我國中小工業の現在に於ける存在理由を吟味することから始める。

中小工業はその視點のいかに拘はらず、その數的評量に於て中小規模に於ける工業が意味せらるゝのであるが、こゝでの問題の進行を助くる意味に於て、いまこれを生産形態から區別して見よう。

一は獨立の手工業者であり、中世時代から殘つてゐるものと新しく發生せるものとの二つがある。各種美術工藝品の製作者、仕立屋、寫眞屋、靴屋、洋服屋等々その數は少くない。殆んど極めて小規模なるものであつて、産業上、輸出貿易上、大した意義を有ち得ないものである。半失業者か這入りこみ易い部門である。その經濟上に於ける地位については、賃銀労働者とさしてかはらない、否むしろそれより以下の場合が往々見受けらるゝ。企業と云はんよりはむしろいはゆる生業である。最近小規模機械

小型動力が用ひらるゝことにより、かゝる手工業の存在が理由づけられつゝあるが、それはすでに機械の導入により、後に述べる小規模なる近代的工場に變質しつゝあるものと見ていい。ともあれこの種手工業の小工業は、表面、獨立性を保つてはゐるが、一國産業のうちに於て占むる重要さはもはや問題ではない。近代的工場の出現によつて没落したところの我國に於ての代表的なるものは足袋工業であらう。醬油業、菓子工業も大規模經營化しつゝある。

二は家内工業に於けるそれであつて、いはゆる前貸制度 (Verlagssystem)、または問屋制度と云はれるものである。この制度は右の封建的社會の主要生産形態であつた同業組合の下に發達した手工業から近代的生産形態の初端的形態であつたマニユファクチュアに至るまでの過渡的生產形態であつたが、近代的工場工業の出現によつて、その支配的地位を失つたものである。がなほ工場工業の附帶的乃至外業部門的生産形態として残つてをり、また新に發生せるものもある。資本家的家内工業と云つてもいいであらう。各種織物業、出來合洋服業、出版業、メリヤス工業、マツチ工業、セルロイド工業、花莖業、玩具工業、等々。しかしてこの家内工業の我國工業、貿易上に於て占むる地位は頗る大である。特に輸出工業に於ける雜貨品の大部分はこの種生産形態に於て生産せらるゝと云つていいほどである。(例へば大阪輸出メリヤス工業組合員三百名のうち工場經營に従事するもの約十二名、工場經營と問屋とを兼營するもの八名、殘餘の二百八十名は家内工業にとづく問屋である。)この生産形態に在りては、通常資本家商人(問屋)が、



手工業者に労働手段、原料を前貸し、手工業者はそれらの損料、原料の代價を差引きたるものを賃賃として受取ると同時に、その製品を商人に引き渡すものである。この制度にもいろいろの種類があるが、その労働條件は概ね極めて劣悪であるがために苦汗制度と呼ばれてゐて、社會問題的に非難の對象となつてゐる。

それで若しこの家内工業が我國中小工業の中心を占め、従つて我國産業上すこぶる重要な地位を占めてゐるとすれば、それは主として我國低賃に原因すると結論していいであらう。家内工業は主として手工業であり、そして我國民が手先の仕事に秀でゝゐるがゆゑに、かゝる家内工業が旺んであると云ふひともあらう。そしてそれもさうであらう。がかゝる熟練の手工業に對してかくも低賃しか支拂はれないのは、すなはち労働力の價値以下での賣買を意味し、従つてソシアル・ダンピングの一條件を意味してゐる。我國家内工業がたゞ低賃のみによつて漸くその存在を保つてゐるとすれば、その技術的生存理由ははなはだ薄いと云はねばならぬであらう。

また家内工業はその伸縮が容易であり、好景氣が來ればドン／＼擴張し、一旦不景氣が襲來すればすぐ止めてしまふ。景氣變動の影響を蒙むることが最も甚だしい。その損失は全部家内労働者に歸せられてしまふ。のみならず家内工業は、つまりは大資本の支配下に置かれてゐる。元締へとたぐつて行けば必らずや大資本にぶつゝかる。家内工業者から仲介商人、それから問屋、大商人乃至は大商事會社、大

百貨店、大産業會社へと一聯の關係が引つばられてゐることは衆知の事實である。

(註) 我國の家内工業、小工業に於ける勞賃の低いことは從來から有名であつたが、最近年に至りて、他の近代的大工業に比べて、特に著しく低下し來つてゐるやうである。いまその二三の例を示さんに、某電球工場に於てはフード部(熟練工)、昭和三年當時は一日實收二圓五十錢―三圓だつたのが、現在に於ては一圓五十錢―一圓八十錢。また某輸出小型球業者に在りては、昭和四―五年には下請業者が問屋から受くる工賃は十五ミリ豆球一個四錢だつたのが、昭和八年末には一個九厘五毛になつてゐる。四分の一の下落である。<sup>1)</sup>次にセルロイド玩具の家内工業に於ける勞賃事情について見んに、一日八時間労働と假定しての日收は、

男	一、二〇錢	九〇錢	五〇錢
女	七〇錢	五〇錢	二五錢
		熟練者	不熟練者
		中位	

しかし實際上は一日平均八時間働くことは不可能であるから、實收入は一日平均熟練者五十錢、中位二十五錢、不熟練者十八錢程度である。内職者は財界の不況に依る自家收入減を捕ふ爲め、或は失業者の進入等から次第にその數を増し、且つ他方には製造業者がこれまで下職に委託してゐた加工を自己の工場で加工するに至る等の事情のため、仕事と従業員數との比例を缺ぎ、同業者の激しき競争を招來するに至り、一年と内職者の日收も減少し來つてゐると云はれてゐる。大正十二、三年頃は日收平均一圓四十錢内外を得てゐた。更に内職者は、右の如き低勞賃に拘はらず、必要なる機械、工具及び張物加工に使用する糊等の消耗品も自己の負擔であり、且つ問屋又は製造業者と内職業者との間には仲介業者が介在して居り、加工賃の約一割を取得する。<sup>2)</sup>

右は家内工業一般について云つたのであるが、家内工業は農家の副業として行はれるもの、すなはち農村的家内工業なるものがある。これは近代經濟社會發生の初端的時期に於ていづこの國に於ても見られたのであるが、最近また別の意味合にて現はれて來た。最近我國農村の疲弊は農業恐慌以後特に甚だ

1) 齋藤健一、電球製造業(社會政策時報百六十四號 324頁)  
2) 沖盛正夫、セルロイド玩具製造業(社會政策時報百六十四號 335頁)

しくなり來つてゐるが、この農村の救済策として農村工業化なる言葉がいろいろの意味にて語られるやうになつた。農村の工業化には（一）農村に於ける従來の人力に代るに動力を以てすること、（二）農村自らが農産物の加工をすること、（三）近代的大工業を地方農村に分散すること、（四）農村家内工業等々があり得るであらう。こゝで問題となるのはこの農村家内工業であるが、それに於ては農村に於ける閑暇労働時間を極めて安價に工業的に利用することである。すなはち或る何等かの部分を各自の家庭に於て製作せしめ、それらを一定の場所に於て組立てるといふのである。かゝる意味に於ける農村家内工業がかゝる新らしき形態にて、果して發達し得るや否やは別問題として、この種家内工業もまた農村に於ける低廉なる勞賃に基礎を置いてゐる。そしてまた都市に於ける大資本の支配の下に置かれることは、その原料の調達、製品の販賣、製造器具機械の購買、貸與の諸點から見て自明のことからである。

三は近代的工場工業であるが、その規模が餘り大ならず、従業員の點から見れば五十人乃至百人未満のものである。この種の中小工業はたゞ生産規模が小であると云ふだけで、別に生産上に於ける特質は見出されない。或る特殊の工業でない限り、大工業に壓倒される危険が多い。工場主が家族とそして若干の労働者と一所に働らく。その收盛は、だから、利潤及び自分及自分の家族の勞賃との合計である。しかもそこでの勞賃部分はすこぶる切り下げられたるものである。

我國に於けるこの種小規模工業は、あらゆる産業部門に見られ、その數ははなはだ多いであらう。だが美術工藝業、織物業その他特殊の工業（そこではもちろん已に若干の機械が使用される）はかゝる小規模的工業にて立ち行くであらうが、その他の多くのものは結局大規模工業に壓倒される運命にある。それら大工業の下請工場乃至分肢的工場として残存するのほかは、なほかゝる中小工業が大工業に克服壓倒される運命にあると云つても、資本主義發達の特殊的性質のゆゑに、いついつ迄もその若干が残存することはむろんのことである。

最近我國に於てはこの種中小工業が人絹織物、綿織物、毛織物、その他電球、セルロイド、自轉車等々に於て多く見受けられ、相當の成績を挙げつゝあるが、景氣變動の波にさらはれることは最もはなはだしいであらう。現今に於てはたゞ爲替安、低勞賃等のため、からうじて一息ついてゐるにすぎない。なほこゝに我國中小工業の現實的生産形態には、これら三形態の彼れ此れの混合的形態のものがはなはだ多いことを一言して置かう。

さて以上の如き諸生産形態にある我國中小工業は、いつたい如何なる理由により、たとひ論者の主張するほどでないにしても、兎も角他の諸資本國と比べてはなはだ多く現存しつゝあるのであらうか。

我國資本主義は歐米資本主義よりはズット立遅れて出發し、そして極めて短年月の間に急速に發達し

た。従つて我國は歐米資本國の如く徐々にそれぞれの發達段階を經過してゐない。我國は産業革命をほゞ成就したかと思ふと、すぐに獨占時代に這入らざるを得なかつた。これすなはち我國資本主義のうちに幾多の封建的殘存物を包含してゐるわけであるが、また大企業が中小企業を残りなく壓倒、支配し得なかつた所以である。獨逸が英國に對してなほ中小工業の殘存比率が多いのも、これに相似たる事情にもとづいてゐる。決して大企業の中小企業に對する優越性の理論の例外を爲すものではない。前世紀の末頃獨逸社會政策學會は、大規模工業に對する中小規模工業の競争力についてアンケートを試みたことがあるが、その結果は右の理論を覆すものではなかつた。

我國中小工業が右のやうな根本事情によりなほあまたに殘存してゐるに拘はらず、我國重要産業の方面に於ては大企業、大資本の制覇の進行は現實の事實である。一方に於けるあまた中小工業の殘存、そして他方に於ける産業獨占の強化——かゝる現象は後進資本國に於て見られる所であり、獨逸に於てもすでにかゝる事情は、英國に比較して、顯著に見受けらるゝ。

それにかゝる國々、わけても我國に於ては、依然として巨大資本、大企業は産業の凡ゆる方面にその觸手をのびしつゝあり、中小工業の上にももちろんのしかかりつゝある。がこゝに巨大資本、獨占團體の中小企業支配の形式が若干異なる様態を帯びて來ることは認めねばならぬであらう。すなはち中小企業の技術的經營化それ自體がすぐ大經營體に移るでなしに、それはそのまゝ存続しつゝも、資本關係

的に大企業、獨占體にまき込まれ、その獨立性を失ふことである。そこではもはや右の中小企業は嚴密なる意味の中小工業ではなく、一つの組織體に於ける一分肢の如きものとなつてゐる。中小企業としてはすでに没落してゐる。もちろんかゝる様式をとらずに、中小工業の技術的經營體自身の崩壞することにより、大工業制覇に至る通常の途を歩むこともあり得る。

要するに中小企業の漸次的没落の過程は我國の現狀に於ても現に進行しつゝある。中小工業没落、それが救済の聲はいんまいままで旺んにきかされて來た所である。現今に於ける我國中小工業の狀態、その重要さは、過去數年間のそれに比し、大した相違はない。たゞ最近の爲替安、従つて低勞賃によつて若干廻み返つて來たことが、多くのひとをして俄かに、その合理的存在について、またその永續的存在について餘りに多くを語らしめるに至つたにすぎない。

昭和六年末の我國金輸出再禁止以後、我國圓價は低落に繼ぐに低落を以てしたが、この爲替安が我國輸出貿易の躍進的なる進出を可能ならしめた原動力であることは云ふまでもない。しかして我國中小工業のいはゆる繁榮もこの低圓價に負ふてゐると云つていゝ。最近の中小工業謳歌の聲も主としてこの輸出産業に於ける中小工業の地位の重要さからして來てゐるのである。それでこの爲替安の事實が消滅するとき、健全に残り得る中小工業果していくばくかは問題であらう。しかしこの問題は獨立にそれ自體として取扱はるべきではない。

右の低爲替と密接に結びついて我國低勞賃の問題がある。爲替安に乗つて大いに海外へ進出しようとするも、圓價の低落は輸入原料、材料の價格をそれだけ騰貴せしむることになるが、このことは原料、材料を輸入に俟つこと多き我國輸出産業にとりてはなほだ喜ばしからざる事情である。それで生産費の低下を他の生産費部分、主として勞賃部分に求めようとする。圓價が下がれば下がるだけ勞賃部分の切り下げが行はれる、と云ふことになる。この圓低價と低勞賃との離るべからざる關係を忘れてはならない。しかるにこの低勞賃はちやうど待ちもうけてゐたが如く、その諸條件を充たしてゐた。農業恐慌による農村の極度の疲弊にもとづく半失業的農村人口群、失業保險制度その他失業救濟制度を缺くことに主として起因する大量的潜在的失業群の存在、それから食糧品の低價等々により、低價勞働力はいくらでも求め得られる。圓低價による原料、材料價格高を低勞賃によつて相殺してなほ餘りあるものがある。

我國中小工業がかゝる意味での低價勞働力を利用することによつて、いはゆる繁榮を來たしてゐることは、何と云つても否定できない。この低勞賃の事情が果して一時的のものであるかどうか、は別問題として、若しこの事實が消滅することゝなるならば、我國中小工業の大部分が同時に衰滅の悲運に遭はねばならないであらうことは確言していゝであらう。なほこの點については後に至つても觸れるつもりである。

#### 四 殘存的中小工業いくばく？

右は我國中小工業の一般的存在理由であるが、かゝる存在根據の上に立てる我國中小工業は、しかるばいかなる將來性を有つてゐるであらうか。いかなる中小工業がいかなる意味にて殘存的であるかと云ふ問である。

(一) 我國もいまでは一資本國として、歐米資本國と殆んど同じ發達水準にまで達してゐる。がその特殊的發達のために、將來に於て、以上の如き中小工業が無慘にも没落し去るとは信ぜられない。依然として歐米に比し多くの中小工業が殘存するであらう。けれども大資本、大企業の中小企業に對する壓迫、支配の手は益々擴がり行くであらう。景氣の變動ある毎に中小工業は、何等かの形に於て、大企業大資本の支配の下に置かるゝことゝならう。

我國中小工業の全般的な存續條件としてさまざまに擧げらるゝが、それらをブツ飛ばしてなほ自己を貫徹する法則——すなはち中小企業より大企業の方が利潤率が高い——は依然として作用してゐるのである。もちろん一般的に見ての話である。以下にあげるところの特殊的中小工業は別である。いま若干このことについて語ることにする。

我國中小工業存在の最大の理由として、そこに於ては大規模工業に於けるよりは、多くの利潤が獲



得せられる、と主張するひとがある。若し我國中小工業の永續的存在が信ぜらるゝならば、當然にそれら中小工業により、多くの利潤、乃至尠くとも大工業に於けると變らぬ通常の平均利潤が、相當長きに亘つて、確保せられてあらねばならぬからである。この證明は従つてはなはだ重要である。

商工省は中小工業經營狀況を調査の結果、その存在の理由をこの點に求めてゐる。この調査報告について見よう。

中小工業收益表

(昭和七年十月末現在)

資本金に對する利益率 (△印缺損)

從業員規模	瑛瑯鐵器	絹紬	縞三綾	陶磁器	電球	毛織物及毛交織物
家族のみ	五	二四	一	二九	一一五・二	一九・六
三人未滿	一	二五	一	一三	一	一〇・〇
三—五人同	六	九	一	一三	一八・九	八・四
五—七人同	△	二一	二	一四	二五・〇	一八・五
七—一〇人同	三	九	一五	一二	六一・一	九・二
一〇—一五人同	一三	一二	四	一一	五七・一	一七・一
一五—三〇人同	一八	一六	八	一二	二〇・七	一三・三
三〇—五〇人同	二	九	一〇	四	一五・九	一一・一
五〇—一〇八人同	△	五	一三	七	六・二	一三・四
一〇〇人以上	△	一	一六	四	二三・〇	一二・九

資本金

五百圓未滿	△	一	六七	三	一五三	一三四・三	二三・二
五百圓—千圓	↓	一	七	一	六七	六一・六	一八・九
千圓—二千圓		一八	三六	一二九	三六	七九・一	一二・四
二千圓—三千圓		三〇	二一	△	二六	三〇・八	一一・六
三千圓—五千圓		一六	二五	二〇	一四	三九・六	一五・九
五千圓—一萬圓		二一	一七	一九	一一	三三・一	一七・一
一萬圓—三萬圓		一七	一二	二	八	二二・九	一四・一
三萬圓—五萬圓		一	六	七	三	七・三	一二・二
五萬圓—十萬圓		五	六	七	六	一六・四	一〇・四
十萬圓以上		九	一三	一	四	二一・六	一二・九

この表で見れば大體に於て比較的小規模のものが利益率が多いことになつてゐる。

かゝる調査ははなはだ有益であらう。中小工業存在の理由としては、そこに於ける利潤の大小が最も基本的の問題であるからである。がこの調査からは遺憾ながら、かゝる目的に適ふが如き効果を期待することはできない。多くの欠陥、不備があるからである。

エコノミストの指摘せる如く、<sup>1)</sup>右の調査に於ける最も利潤多き中小規模の工業に在りては、いはゆる利潤はホントの意味に於ける利潤ではない。それには業主及び家族の勞賃が含まれてゐる。かゝる小規模工業に於ては従業員が尠いのであるから、この勞賃部分の比率は大きい。更にまたかゝる小規模工業

1) エコノミスト、昭和十年三月一日及び十一日號『中小工業存在理由と對策の検討』

に在りては、概して長労働時間、低賃金の事實は普通見らるゝ所であるし、副利施設はなく、また工場衛生設備は缺けてゐる。これらのことによつては漸く右のいはゆる利潤をあげてゐるにすぎない。これらのものを差引けば、むしろこれら小規模工業はいはゆる飢餓工場たることにならう。いまエコノミストの擧げてゐる一例を引かんに、陶磁器製造業に於て資本金五百圓未満の規模の工場は十五割三分（右表参照）といふ高率の収益率をあげてゐるが、資本金を一工場當り五百圓と假定するとその十五割三分は僅かに七百六十五圓に過ぎない。しかしてこの規模の工場に働いてゐる家族従業員は一工場當り（全員四人三分）二人二分の割合になつてゐる（この収益率對家族従業員割合の比較表略す）。それで若しこの二人二分の家族従業員が一日一回の賃金を支給されると、十五割三分の収益はあべこべに缺損を生ずることとなる。この中小工業よりは大工業の方が利益率が多いことを實證する材料はほかにも數多くあるが、こゝに愛知、岐阜、三重三縣陶磁器營業支出分析表（昭和六年十一月一日以降一箇年間）について見るに、家族従業者のみによるものに在りては、純益金の比率は斷然高く三二・三%を示してゐる。がこの點に對してはかやうに云はれてゐる。<sup>1)</sup>『我國の陶磁器工業に於ては前に述べたるが如く小規模のものが割合に多く、しかも賃銀及び給料を特別に支拂ふことも必要としない家族従業者が従業者總數の三分の一乃至四分の一を占めてゐるために、生産費の内容が雇傭従業者を役する場合と著しく異なるといふことは、我國の陶磁器工業の實狀を理解する上に於て頗る重要な事實である。即ちこれら

1) 美濃口時次郎、陶磁器製造業（社會政策時報百六十四號）280頁。

の家族従業者を主とする經營に在りては、かゝる従業者に對して現實に賃銀及び給料を支拂ふ必要がないために、第十五表の家族従業者のみによる經營について見るごとく、實はそれほど利益を得てゐないに拘はらず如何にも多くの利益を擧げてゐるやうに一應考へ得られるのであつて、従つてそれが家族従業者に對しても雇傭従業者に對すると同様の賃銀及び給料を支拂つたならば、寧ろ損失になるであらうと思はれるやうな値段であつても、進んで注文を引き受け易い。』

(註) 中小工業の方が純利潤率は反對に尠いと證明はさきに擧げた東京市工業調査速報に於ても與へられてゐる。右のエノミストの引用せる所に従つてそれを見んに、個人組織は殆んど大部分が中小工業であり、法人組織は大部分が大規模工業であるとして差支ないであらうが、いま法人と個人との収益狀況を見んに左の如し。

個人法人別収益		純益の百分比	
	収入(工場當)	經費(同)	
總計	一四、〇〇〇圓	一一、二八〇圓	一九・四%
法人	二七四、九〇六	二二〇、五七七	一九・八
個人	五、六八〇	四、六〇五	一九・〇

これで見ると法人は一割九分八厘で個人より八分多い。それでも個人は一割九分と云ふ比較的高い利潤を擧げてゐるが、このうち業主、家族の勞賃部分に當るもの、固定資本の償却などが差引かれてないとすると、収益率はずつと悪くなる。更に純益總額に於ては個人千七十五圓に對し、法人五萬四千三百廿九圓で、個人の利益は法人の一分九厘しか當らぬ。いま同速報(第四)の結論的部分から若干の言葉を抄いて置かう。

『以上四回にわたりて逐次發表せる速報を通じて明らかなるが如く、現時における本市工場の分布狀態は、中小工業がその大部分を占めて本市工業の一大特徴を形成してゐるのである。しかしてこれ等中小工業者の収益は大

工業者のそれに比して極めて寡少に止まることは、中小工業者の窮境を窺ひ知るに難くないのである。『進んで本市工業界を總観するに輒近の偽替安とインフレの波に乗つた工場の躍進振りは目覺しき活況を呈し、工業界としては一面喜ばしき現象を示してゐるが、これ等大工場の下請工場たる群小工場はその割合に潤つてをらず、上述工業關係以外の中小工場に至つては舊態依然として沈衰状態を續くるものが大部分を占めてゐるのである。』エ  
コノミストの右の論文は大いに參考の價值がある。附記して置く。

でかゝる小工場に於ける利益は、むしろ、勞賃ともいはるべきものである。そしてしばしば飢餓勞賃でもある。それでかゝる小規模工場は、たゞ低勞賃によつてのみ存續し得るにすぎないといふことになる。而してこの不況期が續く限り、我國に於ては低勞賃の現象が近き將來に解消するであらうとは考へられないし、また失業保險制度乃至其他の失業救済策が實施されない限り、かゝる基礎に立脚せる我國中小工業は、それだけの理由からだけでは、さう安々と没落するに至ることもないであらう。但しこの際での存續は、利潤が多いからではなくして、一種の失業救済的役目をもつた飢餓的工場として、乃至は半ば賃労働者の生業としてである。歐米に於けるが如く、多くの巨大企業と多くの純然たる近代的プロレタリアート、それから多くの失業労働者の現象と、我國に代表的に見らるゝが如き、より少き巨大企業とより少き近代的プロレタリアート、それから多くの半失業的中小工業労働者の現象と、そのいづれが望ましき現象であるかは興味ある問題であるが、こゝでは觸れる限りではあるまじ。

右述べたる——中小企業の方が利潤が少い、利潤からの永續性はそこでは主張せられてはならない、

中小工業の一般的存立根據はすこぶる薄弱であることについての實例は至る所にある。少し不景氣が來ればすぐ悲鳴を擧げるのが中小工業である。利潤はるかその勞賃部分の回收さえ不可能になるからである。現今我國中小工業の代表的なるものと見られてゐるものうちにも、いつかは没落する運命にあるものが可なり多い。いま左に我國人絹織物業の例を引くことゝしよう。

我國の人絹織物業は、さきに見たやうに、殆んどその大部分が職工百人未滿の中小工場に於て行はれてゐるのであるが、主として地方の家内工業的低勞賃にもとづき發達し來つたものである。我國の低勞賃が將來とも續いて存在する限り、そしてやゝ高級織物に關する限り、かゝる小規模工場も存續するであらうが、技術の優秀、不景氣に對する對抗力等々の理由からして、大規模工場に漸次壓倒され行く可能性もはなはだ多い。最近に於ける福井縣その他の地方に於ける小規模人絹織物業の悲鳴、それから人絹會社の製絲單一作業から製織作業への進出はその好例證であるであらう。このことは我國大紡績會社が過去にすでに經驗したところであり、紡績から織布へ、更にその加工へは自然の歩みであつた。人絹會社またこれに倣ふのは當然であらう。

我國の人絹製織機は只今のところ、まだまだ改良の餘地が多く残されてゐると云はれてゐる。大日本紡績會社常務取締役の今村奇男氏による（福井高等工業學校及び豊田自働織機製作所援助）綿布式人絹織物製織法はその改革の最も著しい例であらう。それによれば、從來の人絹織布工程が經糸準備に八工程、綿糸

準備に二工程計十回工程であるに對し、綿布式改良方法工程は、經糸準備に五工程、緯糸工程は一工程合計六工程に減じ、非常に簡易化される。これに従つて使用人員の節約されることは大きい。在來式と綿布式とで使用人員はどれほど異なるか。その比較を示さんに左の如し。

經糸準備工程

	綿布式	在來式	比較減△
經 繰 返 し	男女 一八人	男女 一七人	一人
糊 付	男女 三四	男女 七	—
乾 燥	男女 三	男女 三	△三
再 繰 返 し	男女 三	男女 一五	△一五
整經ビーミング	男女 五	男女 七	△二
箆 通 し	女 六	機械に 込む 七	六
緯糸準備工程			
繰 返 し	男女 三	男女 一〇	△一〇

	緯	捲	機	織	仕	上	げ	以上全合計
	男	女	男	女	男	女	男	女
	二〇		五五	六	一七		一一五	一〇五
		一二	一二六	一三	一七		一八七	三七一
		八	△七八				△九三	

(右は在來式として福井、石川その他人絹織布の最も發達したる數縣より、能率良好との定評ある數工場織機設備二百三十七臺の實際運営に基き、一臺一反合計二百三十七反を生産するに要する使用人員を擧げ、これを大日本紡績會社の大阪市内工場の運営と比較したるものである)

右によれば綿布式運営は、在來式運営に比し、女に於て七十二人、男に於て二十一人、合計九十三人の減少となつてゐる。割合から見れば四割三分の減少である。

次に使用人員減による勞賃高の減少について見んに、右に擧げたる在來式工場に於ては、賃金は男平均約八十錢、女同四十五錢見當である。しかるに改良式工場たる大日本紡の大阪市内所在工場においては、男一圓、女六十錢見當を要する。地方所在工場の賃金よりは三割乃至三割三分高い。で改良式の方が在來式に比し、使用人員の減する割合ほどに賃金は減じない。賃金額に於ていくばくの低下が實際齎されるかを表示すれば左の如し。



比較	△	減	綿布式		使用人員	日給	總額
			男	女			
計			一一〇	一二五	一〇六	一〇〇	六九・〇〇
在來式			一八七	三一	八四	〇五	二四・八〇
計			二一八				一〇八・九五
比較	△	減			△九三		二〇五
							△二九・九五

すなはち綿布式では二十九圓九十五錢の節約ができる。二割八分弱に當る。

使用人員の減少はひとり支拂勞賃額の減少を結果するばかりでなく、工場の規模、社宅、寄宿舎、その他附屬建築物消耗費等々に幾多の影響を及ぼすことは云ふまでもない。<sup>3)</sup>

むろんかゝる改良式人絹製織機もまた漸次中小規模の工場に持ち込まれるに至るではあらうが、いまのところはさうは行かぬ。大會社に最先に使用される傾がある。況んや昨今の人絹絲の低落によつて蒙れる痛手を、大人絹會社は人絹織布を兼營することによつて、免れようとしてゐる。我國大紡績會社と同じく製絲、織布、加工の一貫作業が人絹會社に於ても見られるやうになることはむしろ必然であるであらう。

3) 今村奇男氏、人絹織物製織法の革命(ダイヤモンド、昭和九年十二月一日號 33頁以下)

(註) 最近我國大人絹會社の織布への進出計畫の例――

富士織維(富士紡系)

織機五百臺

東洋紡

守口工場に於て試験

日本レーヨン

織機三百臺その他

錦華人絹

研究中

庄内川レーヨン

研究中

會敷絹織

研究中

東京人絹

試験中

(福日、昭和十年四月九日)

中小工業の永續的存在、新興中小工業の發生の一般的理由として誰しもが擧げるところのもろくの理由は(さきにその代表的なるものを紹介した)、右に擧げたる基本的事情の前にはまことに薄弱なる乃至第二次的たる理由たるにすぎないであらう。それらの多くのものは中小工業の壽命を若干引き延ばし得るにすぎない。例へば蒸氣動力に代るに電氣動力を以つてすることが中小工業更正の一理由とされるが、そして或る程度に於てさうであらうが、電力を使用すること多き産業は中小工業のものより大工業のものゝ方が多い。電力をただ動力としてではなく、それを材料として利用する電氣化學工業の如きは、むしろ、ただ大工業に於てのみ行はれ得る。また電力の安價購買に於て、自家用發電乃至關係電力會社による低廉なる電力の使用に於て、大企業の中小工業に對する優越性は決して無視さるべきではない。

また企業の弾力性多きことを中小工業の特徴として數へられるが、そして固定資本の比較的尠き中小工業がこの點に於て多くの弾力性を有つてゐることは事實である。が景氣の變動によつてその事業を縮少することは、中小企業にとりては致命的の打撃を意味する。特にやゝ生業的に營む場合、事業を不景氣によつて縮少すること乃至は中止することは、自己およびその家族の生存の問題すら意味する。弾力性ありとするも、止むを得ずさうさせられるので（この點については家内工業の場合が最も甚だしい）不景氣對抗力はむしろ中小工業よりは大工業の方が強い。

(二) 我國中小工業も漸次衰滅、没落するの運命にあるからとて、その全部が没落するものではない。特殊なる中小工業はもちろん残るであらう。がこれと雖もただ經營的獨立を保ち得るだけで、その經濟的乃至資本的獨立の失はれるものが多いであらう。

第一に國民的乃至民族的産業とも云はれるところのものである。國民の特殊的需要、消費、欲望等の點から見て、國民の傳統的日常生活様式に適せる生活要品を造る産業、従つて近代の機械、化學工業には概して適應し難い産業を國民的産業と呼ぶひとあらう。がこゝではかゝる消費、需要の側から見たるものではなく、生産の點に於て我國民特殊の熟練、技能にもとづく産業を意味する。劃一的大量生産に適せず、ひとびとの趣味嗜好に投ずるをその眼目とするやうな工業である。この國民的産業にも國民の傳統的生活に根ざすところの古き型のもと、近世的生活の需要に應ずるところの新らしき型のもの

との二つがあるであらう。美術工藝品、諸種の織物等々は前者の代表的のものであり、時計、食卓洋食器等々は後者に屬する。

これら國民的産業と云はれるものが、一般的に大規模工業に適せず、手工業、家内工業または小規模の工場工業に適することは云ふまでもない。最近年問題となつてゐるところの愛知縣下の毛織物業も、小規模なるがゆゑに綿柄などの點に於てよく各種の人々の趣向に投じ得るのである。新潟縣燕町の洋食器製造業の成功もまた同じ理由によるところが多い。

我國民は由來手先が器用であると云はれてゐる。でこの長所をよく利用して、更に新らしき國民的産業を起すべしとの説がある。時計、各種精密機械等々の方面への進出の將來は有望であらう。しかし最近に於ける精密機械工業は小規模工業にとゞまり得ない、漸次大企業、大資本のうちにまき込まれることが多いであらう。機械でなしに、たゞ道具を以てするが如き熟練、器用はもはや過去のものであり、現代のそれは主として機械を以てするものであり、しかしして機械それ自身の設置は同時に大資本を意味することが多いからである。それで經濟的に獨立性を保持しつつ、小規模なる新らしき國民的産業發達の餘地はさほどでもないであらうと思はれる。

(註) 新潟縣蒲原郡燕町のキセル、パイプ、特に食卓洋食器の工業は最近世上の注目を集めてゐる。英國のシユフ・イールド、獨逸のゾーリングゲンに對して日本の燕町と云はれて來た。それは近代工場工業と近代的家内工業との混合型態である。例へばキセルの製造行程では、或る近代的工場で眞鍮の板を機械で打ち抜く、カン首と、そ

の胴體になる部分と、吸口になる部分を平たく型の通りにぬきとる。この三個の部分品は市内の家庭へ送られる胴と吸ひ口の部分は縦に二つ折りとなつて戻つて来る。それからガン首と胴體を密着させる。これを型に入れて丸い形にするのである。次にツナギ目を鑢付して研磨される。再び市内に送られてクローム鍍金を加へられる。羅宇の竹でつなぎ、キセルが出来上る。半分は簡単な機械、半分は手工である。約二十工程を要する。安いものは一本一錢五厘である。大部分は女工で初任給二十錢、熟練工と雖も六十錢程度である。

スプーン、フォーク、ナイフの洋食器の製造も生産形態は右と同じである。矢張り工場で大體仕上げてから、市中の家庭へ送られてクローム鍍金されて戻つて来る。出来上つたスプーンは一ダース五十錢で取引される。洋食器の製造にはその初めは随分苦心が拂はれたらしい。

なほ食器の製造元六十軒、鍍金屋八十軒、キセル屋十何軒。原料、販賣の點に於て特殊の便益はない。原料は京濱京阪神地方で購入し、また製品は主としてそれらの地方へ出す。専ら特殊の生産技術にもとづいてゐる。

(三) 大企業、大工場の下請工場、部分品工場として残るものは可成りあらう。大工場がその周圍にこの種の多くの下請工場、修繕工場、部分品工場、材料品工場をその外業部工場としてもつことはあり得る。近代的中小工場工業から近代的家内工業に至るまでの種々の形態があり得るであらう。もちろんそれらはすでに眞の意味にての獨立性を失つてゐるのである。それらは大企業の支配の下に置かれ、その一分肢となり終つてゐる。嚴密なる意味に於て殘存的中小工業と云ふを得ない。自動車工業、造船業、大百貨店等々の下請工場、部分工場などその數は案外に多い。

(四) 右に述べたがやうな特殊的性質を有たず、従つて技術的企業的金融的その他の關係からしては當然に大企業に比べて劣勢にある中小企業にしてなほ存立をつゞけてゐるものは頗る多い。最近問題と

1) ダイヤモンド、昭和九年十二月一日、十一日號参照。

なつてゐる我國中小工業の多くはこの種のものであらうと思はれる。それらのものは主としてたゞ低爲替、わけても低勞賃によつて存続し得る。原料の購買、製品の販賣に於ても不利であり、金融の點に於てももちろん大企業に及ばない。機械その他生産設備は一般的に劣勢である、と云ふのがかゝる工業の特徴であるが、かゝる缺陷を相殺するのが、極端なる低勞賃、自己及び家族の共働、不完全なる工場設備等々である。ひとはかゝる工場を目して飢餓工場とさえ云ふ。

これらのものは、その存立の根據であるところの低爲替、低勞賃の事實が解消するならば、従つてまた解消するであらうが、現實の事實としては、爲替の方は兎も角、(低爲替もその初めは我國産業に有利であつたが、最近に至つてはその不利なる點——原料高、生産設備高等々が現はれ始めた)我國低勞賃の事情に大した變化があらうとは思はれぬ。原料を輸入に俟つ工業に在りては、爲替關係が輸出に有利に赴けば、それだけ原料高のため、勞賃部分へ喰ひ込むことが甚だしくなる。原料高の不利は仲介商人からして中小工業へと轉化されることが多い。また爲替關係が輸出に不利に赴けばまたそれはそれで同じく勞賃部分への攻勢が強まることゝならう。勞賃と雖もさうむやみに切り下げるわけには行かぬ。一定の限度がある。兎も角我國勞働人口の増加の傾向はこの事情を一變すべしとは思はれぬ。低勞賃にもとづくかゝる中小工業の存続はいつまでも問題となつて残るであらう。いはゆる *hunger-export*、ソシアル・ダンピングの源流である。

かゝる意味の我國中小工業は、さきにも一言したが、一種の失業救済的役目を演じてゐることゝなつてはゐる。我國には失業保險制度その他失業救済策が缺如してゐるため、失業者は勢ひかゝる中小工業の方面へ流れ行き、そこで一時的にでも汲收されることゝなる。むろん半ば失業的なる低劣なる労働條件の下に於てである。

かゝる中小工業に於ける労働條件はすこぶる低劣であるが、しかし工場法適用の工場に於ては大工業に比しさう格段の差があるとは考へられぬ。若干の大工業に於てやゝ労働貴族的存在があるかも知れぬが、一般的に見て大工業の労働條件も、かゝる中小企業の低劣なる労働條件の影響を受けて、決して高くはない。低賃賃を利用することは決して中小企業のみではない。例へば我國大紡績會社に於ける最近の賃賃の傾向を見よ。でこの點だけで中小工業が大工業と對抗してその存續を保つて行かうとするには限度があると云はねばなるまい。

低賃賃にのみ主として依存せるこれら中小工業は、優秀なる機械、工場による近代的技術を利用すること少いものであるから、失業救済的意義があるのほか、我國産業の重要部分を占むることは決して望まじきことではないであらう。かゝる低價労働の利用によつて、より發達すべかりし生産技術の發達を妨げることはしばしば見るところである。

けれども實際に於ては、一般的には、かゝる飢餓工場の有つ唯一の條件を破つて、優秀なる近代的工

場はドン／＼發展するであらう。またさうしなければならぬ。肉彈労働に代るに機械労働を以てせなければならぬ。

(五) 右によつて我國中小工業のうち果していかなるものが、いくばくが殘存し得るか、についての分析が終つたわけであるが、右に述べたるいはゆる殘存的中小工業と雖も、すでに直接的に大企業の一分支となり終れるものは云ふまでもなく、結局に於て、さまざまの點に於て、大資本、大企業の傘下に立たざるを得ないことにならう。表面的には經濟的獨立を保つてゐるが如く見えても、金融上、原料購買上、製品販賣上等々に於て、他の大資本の支配の下に置かれてゐる。その制約、支配を受けて、自己の製品の價格まで大資本の言ひなりほうだいになつてゐることは稀らしくない。大商事會社、大問屋大事業會社、大百貨店の間接的經濟的支配の下にある中小工業は夥しいものであらう。

もちろん工業組合の結成によつて、獨立性を支持し行くものもあらう(それらは當然に殘存性を有するものでなければならぬが)。かゝる工業組合の下に集まれるものと雖も、大資本、大企業の支配的勢力に壓倒される危険は大きいであらう。

## 五 結 語

以上我國中小工業の永續的存在說乃至は謳歌說の根據となれるところのものを分析解剖することによ



つて、そのいかなるものが、またそのいくばくが残存的中小工業であるか、について一應の見通しを勝ち得たわけである。

(一) 我國中小工業の重要さが餘りに過大評價されてゐる。

(二) それらのひとびとは我國中小工業の永續的存在について餘りに樂觀的である。特殊なる中小工業は兎も角、一般的には我國中小工業の將來は依然としてかんばしくない。現時に於けるそれが表見的なる繁榮は決して永續的性質を有つてゐない。低爲替、低勞賃にのみ依存することによつてやうやくその存立を續け得るが如き我國中小工業の將來は企業的に或る限られたるものであらねばならぬはもちろん、社會政策的には非難の格好の對象たるであらうし、また我國産業發達の將來から見ても、輕工業、消費財生産、雜品工業に重點を置くが如きは、決して喜ぶべきではないであらう。が大企業、大資本はこれらの中小工業の多くのものを、さまざまの反對説あるに拘はらず、壓倒、支配するの手を緩るめなからう。

(三) それで我國中小工業對策の基調を一變するの必要はさし當りないであらう。矢張り弱少企業として國家による助長保護政策が大いに要求されねばならぬ。眞に自力的に更正、發展し得るが如き中小工業は、或る特殊のもの以外には殆んど見出し得ないからである。(完)